

野球競技者における感情調節が選択反応に及ぼす影響

順天堂大学大学院
スポーツ健康科学研究科
学籍番号：4119009
氏名：加藤 勇志

【目的】

感情調節はアスリートが心理状態を調整する際に使用する方法であるが、感情調節がアスリートのパフォーマンスに及ぼす影響については明らかにされていない。そこで、本研究は野球競技者における感情調節が選択反応に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

野球競技者群 10 名、コントロール群 10 名を対象に行った。International Affective Picture System のニュートラルまたはネガティブな画像刺激を提示し感情を誘発させて、再評価、抑制、注視（コントロール）の 3 条件下で、野球のバッティングを想定した選択反応課題を実施し、感情調節が各実験条件における課題への反応時間と正答率に及ぼす影響を検証した。再評価方略の教示は、「刺激は映画の映像の一部としてつくられたものと捉え直してください」、抑制方略の教示は、「感情を態度や表情に出さないでください」であった。

【結果】

3 要因分散分析の結果、課題の主効果が確認され、反応時間に有意な差が認められた ($F(1, 54) = 6.97, p = .017$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、野球のバッティングを想定した課題において反応時間が短かった。また、感情調節条件の主効果が確認され、正答率に有意な差が認められた ($F(2, 30) = 6.97, p = .003$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、ニュートラル条件よりもネガティブ刺激を提示した後の注視条件において正答率が低いこと、ネガティブ刺激を提示した後の注視条件よりもネガティブ刺激を提示した後の再評価条件において正答率が有意に高いことが示された。

【結論】

野球競技者感情調節が選択反応に影響を及ぼす可能性が示唆された。具体的には、ネガティブ感情下において感情調節の再評価方略が選択反応課題の正答率を改善させる可能性が示唆された。